

助動詞 「べし」

◇活用

基本形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
べし	(べく)	べく	べし	べき	べけれ	○
べから		べかり		べかる		

◇接続

「べし」はに終止形接続で、ラ変動詞とラ変型の助動詞の場合は連体形に接続する。

◇意味

① 推量 「～だろう」

：文末にあり主語が「一人称」のことが多い。

例) 人は、かたち・ありさまのすぐれたらんこそ、あらまほしかるべけれ。(徒然草)
(人は、容貌や容姿が優れているようなことが、望ましいことであろう。)

② 意志 「～よう」

：主語が「一人称」のことが多い。

例) 每度、ただ、得矢なく、この一矢に定むべしと思へ。」と言ふ。(徒然草)
(毎回、ひたすらに、後の矢はなく、この一本の矢で決めようと思え。」と言ふ。)

③ 適当・勧誘 「～がよい、～たらどうだろうか」

：主語が「二人称」のことが多い。「こそ～め」の形は適当・勧誘になりやすい。

例) 世の常のすきずきしき筋には、おぼしめし放つべくや。(源氏物語)
(世間普通の浮気な人間と思い捨ててなさってよいものでしようか。)

④ 当然・義務・(仮定) 「

：主語が「二人称」のことが多い。

例) まださるべきほどにもあらずと、皆人もたゆみ給へるに
(まだそうであるはずの時期(お産の時)ではないと、だれもが気をゆるしていらっしゃる時に)

④ 命令 「～せよ」

例) 御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。(竹取物語)

(手紙と薬の壺を並べて、火をつけて燃やすなければならないという旨をお命じになる。)

④ 可能 「～できる」

：下に打消しの語を伴うことが多い。

例) 高き山の峰の、下り来べくもあらぬに、置きて逃げて来ぬ。(大和物語)
(高い山の峰の、下りてくることができないところに、置いて逃げてきた。)